

天使を誘惑

高橋三千綱

新潮社版

てん し ゆうわく
天使を誘惑

©Michitsuna Takahashi, Printed in Japan, 1979.

1979年 6月20日 発行

1979年12月15日 7刷

著者 たかはし み ちつな
高橋三千綱

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71

電話(03)266 (業務)5111

(編集)5411

振替 東京 4-808

装幀者 埴 賢三

印刷所 株式会社金羊社

製本所 神田加藤製本

定価 830円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

天使を誘惑

第一部

改札口を出ると駅前広場になっていた。その向こうに商店が建ち並び、買物客が往きかっている。マーケットの隣にはパチンコ屋がある。三十台以上もの自転車が雑然と店の前に置かれ、流行歌に混って賑やかな音が流れてくる。広場にも、車がひっきりなしにやってくる。澄んだ空の下を、絶え間なく人が動いていく。

少しの間、ぼくは茫然と広場を眺めていた。のどかな駅舎と、駅を取り囲んで広がる田園風景を思い描いていたので、すぐにはここが恵子の実家のある街だとは思いつめなかった。駅前には客待ちのタクシーが十台ほども連なっている。

これじゃ、ちょっととした都市じゃないかと思った。家の周囲は畑と雑木林ばかりで、駅までは徒歩で三十分ほど畑の中を歩いていかなくてもならない、といつだったか話していた恵子の言葉から、ぼくは山あいには挟まれてひっそりと息づく静かな山村を想像していたのだ。秋風に押されて舞う稲穂の中に、頬を赤く賑らませた少女時代の恵子を置くと、そこからはぼくの知らない清新な故郷の香りさえした。ここまで来てしまった以上、とにかく恵子の実家を捜し出すほかはない。

駅の待合室にいる数名の若者がうさん臭げにこちらを見ていた。広場にもいきがった様子で肩を揺らして歩く若い男の姿がある。チンピラがいるということは、結構豊かな街ではないか、

そう思いながら、寝ぼけた顔で客を待っているタクシーの運転手のところに歩いていき、前窓から首を入れ、佐野恵子という人の実家まで行きたいのだが、といった。運転手はぽかんとした。フロント硝子を通して前にある駅の公衆便所付近に視線をやってから、どこ、それ、と訊いた。

「駅から歩いて三十分くらいの畑の中にあるそうなんです」

「畑？ 畑だったって、この辺は畑ばかりだけどねえ」

「雑木林があつて、近くには豚を飼っている家もあるという……」

運転手は暗い眼をしてこちらを見ていた。四時間も各駅に停車する汽車に揺られてきた腰の痛みが、今頃になって襲ってきた。背中が重い。

「何か商売やってんの」

運転手は眉間に皺を寄せた。

「親父さんは何年か前に死んでいるんです。胃癌だか肺癌だかだね。たしか電気会社に勤めていたと聞いたな、わりと景気のいいところだったらしいですよ。佐野という名で癌で死んだ人に覚えはないですか」

全然分らん、というように運転手は頭を横に振った。この街にも、都会並みに癌で死ぬ人は多いのだろうかとはよく考えていた。鋭利な風が身体に当たってきた。陽は高いところにある。

「住所はどこ？」

「知らないんです」

「目印になるものは？」

「小学校までは歩いて四、五分だそうだけど……高校へはバスで通っていた……」

運転手はうんざりした様子でぼくを見返した。考えてみれば、ぼくは恵子の家のことなどほとんど知らないのだ。卒業した高校の名前すら聞いていない。いったいこの八ヵ月間、ぼくたちは何を話していたのだろう。とりあえず思い浮かぶのは、いつだったか、ぼくは何故か脇毛が薄いといったとき、恵子があたしは濃いのと答えたことくらいだ。そんな会話を頼りにしていては、恵子の実家など永遠に見つかりそうにない。

「電話はないの？」

電話は、と答えかけたとき、大股に急ぎ足で歩いてきた男が、せわし気にタクシーの屋根を叩いた。運転手はあわてて後のドアを開けた。ぼくの胸の中に淡い光が灯った。

電話は家の近くにあるクリーニング屋の呼び出しを受けていると以前恵子はいった。畑の真ん中にぼつんと建っているクリーニング屋を思い描いて、ぼくは長い間笑っていたものだ。

「そんなところじゃ商売にならないだろ」

「田舎にも勤め人が多いもの。駅前の支店で注文を受けて、本店で洗っているみたいよ」

周囲を見渡すと、カメラ屋の隣にいかにもそれらしいちっばけな構えのクリーニング屋があるのを見つけた。広場を横切って店の前に立つと、カウンターに肘をついて新聞を読んでいた

中年の女が、表情をつぶしてぼくを見た。すみませんが、といって店の中に入った。

おたくはどこかに本店があるんですか。本店？ ええ、畑の真ん中にあると聞いたんです。

中郷の店のことかね。中郷って何ですか。地名だね。近くに豚もいますか。豚？ いるけど少なくなったねえ、飼料が高くてもうけが悪いから。その店の電話番号を教えて下さい。注文ならこっちで受けているけどね。そうじゃないんです、その店の電話で呼び出しを受けている人の家を捜しているんです。えっ？ とにかく教えて下さい。だれの家を捜しているって？

佐野恵子という娘の実家なんです。ああ、恵子ちゃんとか。御存知なんですか。知ってるよ、近いもの、だけど、恵子ちゃんは東京に行ってっけだね。今日帰ってくるはずなんです、車で、もう家にいるかもしれないな。ほうね、あんたは恵子ちゃんの、なに？ えー、友達です。友達ねえ、東京の？ ええ。ふーん。道順を書いてもらえませんか。バスで行くのかね。タクシーにします。そんなら簡単だ、そうかね、恵子ちゃんが帰ってくんのかね、正月に帰ってきただけかなのよう。

肩掛けを巻いて、女は店の外に出てきた。着物のたもとに腕を交差させて手を差し込み、リズムをとるように細めに足を弾ませて広場を横切った。歩道に上がるといぶかし気にぼくを窺い、恵子ちゃんはきれいになったねえといった。以前を知らないのか、ぼくは黙っていた。

「あんたは同じ会社の人かね」

「まあ、そうです」

「代金の一割を払えば品物はくれるんだからね。ああいう店はお客が多いんだろうね」

「多いです」

「いい月給もらうんだろうねえ」

「はい」

ぼくは神妙になっていた。倉庫番のアルバイト学生ですと正直に答えたところで、このおばさんを戸惑わすだけだろう。しかも、すでに菊屋は一週間前にやめている。

女の説明が終ると、ぼくはタクシーに乗り込んだ。広場を出て商店街に入るとき振り返ると、女は寒そうに背中を丸めて、じっとこちらを見ていた。

タクシーは国道らしい広い舗装道路をしばらく走って右折した。砂利道になった。周囲には冬枯れの畑が広がっている。林を抜けると、平屋の住宅がまばらに見えてきた。しばらく走って車は止まった。四号といったらここだと思うけど、と運転手はいった。市営住宅らしい。同じ形をした古い家がいく棟か建っている。タクシーから降りるとすぐ前に、佐野、とほとんど消えかかっている字で書かれた表札をつけた家があった。みつけた、と思った。隣の家の植込みから、鼻の周囲を黒くした醜い犬が顔を出し、短く一声吠えた。同じようにぼくも犬に向かって吠えてから、呼び鈴を押した。反応がない。直接戸を叩いてみた。家の中で声がしたようだった。

気のせいかもしれないと思って、安普請の戸をもう一度叩いた。とたんに戸が外に開かれた。

髪の毛をセットした五十近い女が恐る恐るこちらを見て、は、といった。一瞬ぼくの喉が詰った。家に恵子の母親しかいないことは分っていたが、現実には面と向ってみると、かなりの気遣いがある。人の好きそうな母親の顔立ちが、余計にぼくに罪悪感を訴えてくる。誘拐犯になつたような気さえした。

「突然にお邪魔してすみません。東京から来た上杉といいます。この間まで菊屋で働いていた者なんです」

母親は間延びした顔で合槌をしきりに打った。上杉と名乗ったときは特に大きく頭を振り、はあはあと手応えのある音声を出した。茨城の畑の多いところにも、ぼくの名を知っている人がいると思うと妙な気がした。

それはそれは、といって母親は腰を浮した。口調はのんびりしているが、態度はかなりあわてている。それでも平均的五十歳の女の人より太目なせいか、動きは緩慢だ。ぼくは居間に通された。ざっと見たところ、かなりくたびれた3DKの住宅だ。

居間の片側には硝子戸が入っている。覗くと狭い庭があった。錆びついた三輪車が野ざらしになっている。控え目な日差しが居間に差し込んでいる。コートを脱いで、自分でハンガーを捜して壁にかけた。

卓袱台の前に胡坐をかいて坐ったところへ、母親がお茶を持って、心持ち頬を赤らめて入ってきた。石油ストーブの炎が、ぼく的首筋を熱くした。

「粗茶ですが」

そういつて茶をぼくの前に置いた。古い映画の中でならいざしらず、現実にはめったに聞かない言葉なので、なんといつて受け答えしたらよいのか分らず、結果的には胸をそらせて、むむ、といつてしまつていた。

「恵子さんはまだ帰つてきていないんですか」

「帰ってくるんですか、あの子」

「ええ、今日。昨夜は親戚の家に泊つて、その家の人と一緒に車で来るはずなんです」

母親は頼りなげな顔をして俯いた。ぼくは茶を啜つた。ひどい渋味が口の中に広がつた。

「一緒ではなかつたんですか」

「ええ。ぼくはこちらに来る予定じゃなかつたものですから」

友人から紹介された製本所のアルバイトの面接に行く予定だつた。日給さえよければ今日から働きに行くつもりでいた。ところが、コートを着て下宿を出たとたんに、恵子のふつくらとした白い顔が脳裡いっぱいに映し出され、ついでに草深い田舎にある古ぼけた恵子の実家を想像して不思議な懐しさを覚え、あつさりとして予定を変更して汽車に乗ってしまったのだ。恵子だけを実家に帰し、何も知らない母親に会社をやめたこと、上杉という学生と一緒に暮すつもりであることなどを説明させるのは酷な気がした。やはり、同棲予定の実物が登場した方がよい。「じつは、恵子さんは会社をやめたんです、おととい」

そうなんですってねえ、といって母親は眼をしばたいた。やはり親子だけあって恵子に似ている。ただ、恵子より大分老けていて顔の面積が広い。馬は年をとると顎が張ってくるが、人間もエラが出てくるのかもしれない。お乳は大きい、セーターの上からでも、その先端が臍までかなり接近しているのが分る。恵子もやがてこうなるのかと思うと、腰の坐りが悪くなつた。

「御存知だったんですか」

「はあ。ここしばらく連絡がないものだからどうしているのかと思って、昨日会社で電話をかけたんですけどね。そしたら、岩淵さんという課長の人が出てきて、なんだか事故があったもんでやめたというんでねえ、驚いてねえ」

天井の隅を見上げて母親はいう。驚いたというわりには表情が穏やかだ。微笑んでいるのか、皮膚がたるんでいるせいなのか明確でない。いい母親なのだなあと、覚悟をきめてお茶を二口飲んだ。

「あの子は昔からそっかしい子だから、また何かやって会社に迷惑かけたんだろうと思ってただけ、事故といつてもけがしたわけじゃないようだし、はつきりしなかったねえ」

「ちょっとした手違いですよ、客とのね。陰險な会社ですから、課長も部下をいびってばかりいるんですよ。紳士服売場にもう三年働いている男がいるけど、そいつは岩淵からいまだかつてコーヒー一杯おごってもらったことがないそうですよ」

「はあ、そうですね。あなたも同じ売場にいたんですか」

「いや、ぼくはまだ学生。本来なら今年卒業なんです、予定が狂っちゃって。菊屋では週に三日だけ倉庫の荷受け作業をやっていたんです。一週間前にやめましたけど」

「恵子があなたにも迷惑かけていなければいいんですけどねえ」

「とんでもない。世話をかけたのはぼくの方です」

真実なものだから妙に腹に力が入り、瞬間的ではあったが放屁をしてしまった。母親は卓袱台に視線を落した。俯くと、どことなくあどけない。純真な表情は年齢とは無関係のようだ。

「どんな失敗をしたんですか」

頼りなげな顔の中に、不安におののいている眼があった。娘をいとおしむ母親の表情だった。ぼくの母親も、ぼくのいないところでは同じような眼差しをして突き出た下腹を眺めていることだろう。母が太るたびに、ぼくは母の許から遠ざかっていったようだ。

「直接の原因は、紳士服を現金で買った客が、二万円ほど多く請求されたとわめきたてたことにあるんです。受け取ったのが恵子さんだったんだけど、身に覚えのないことなので答えようがないでしょう。岩淵は恵子さんを泥棒呼ばわりしたそうですよ。社長の前に引き出して、さあ、泥を吐けと叫んだらしいですね。恵子さんは黙って泣いていたそうですよ、可哀そうに。

岩淵は出世の望みはないし、会社からマイホーム資金を借りているので、仕事の失敗はすべて部下のせいにと必死なんです。おととい、恵子さんはぼくの下宿に電話を掛けてきて、

もうやめたいといったんです。やめちゃえやめちゃえといいましたよ。いたって何の意味もないし、待遇も悪いし。残業手当もないんですよ。やめるとなったら、さっそく明後日までに寮を出ていけといわれたんです。で、ぼくの下宿に來させようとしたんですが狭いし、大家もだめだというので、明日二人でどこかアパートを捜そうということになったんです。恵子さんは田舎に住む気はないというし、経済的にも二人で一緒の部屋に住んだ方が便利ですから。ぼくもバイトの日数を増やしますし」

ぼくはぼんやりと聞いている母親に構うことなく一気に喋り、どきくさに紛れて、恵子と同居するつもりであると説明してしまった。急に腹が減った。

御心配をおかけして、といったまま、母親は放心したように硝子戸を眺めている。居間は六畳だが、大きなカラーテレビや机、タンスなどが置かれているので狭く感じられる。

「これから仕事はどうするんでしょう」

臆病そうに肩をすぼめて母親は訊く。

「すぐ見つかりますよ。丁度どこでも新入社員を捜している時期ですから」

「あの子は無器用だもんだから」

「珠算が一級なんだから立派なものですよ。就職するにはいい武器になります」

「書道も二段の免状持っているんですけど」

「それは、就職にはあまり関係ないみたいですねえ」